



温もりと寂しさを感じます

(写真 松本博充)

- 小川村の神社④
- ここに生まれた
- 小川に生きる
- 歴史探索 - 電気 -
- 小川短歌会
- 図書室だより
- 人生百年 私の生きがい
- 路端の小さな命⑤

• 生活古道①



稲丘神社 いなおか

10月8日、飯縄山頂で稲丘神社の秋季例大祭が執り行われました。

稲丘東区（和佐尾村）と稲丘西区（椿峰村）の両境の北方飯縄山頂に五穀豊饒の神を最初は個人の守護神として祀り、のちに地域住民の信仰厚く豊作を祈願したことからはまります。

総代長の久保利廣さんにこの神社の起源と歴史について伺いました。

椿峰城館跡から飯縄山を望む



創建について、伝承によると天長10（833）年坂上田村麻呂（758—811、2代目の征夷大将軍）の支族椿四郎勝政が椿峰村を支配しており、居館（椿峰城館）の鬼門飯縄山頂（飯縄山砦）に五穀豊饒の守護神



修祓 稲丘の地を清める

「稲倉魂の命」を鎮座したといわれています。当時は「大洞山」又は「大道山」と称し、のちの飯縄山は天正10（1589）年に戸隠の飯縄社から分社した「烏天狗」御神像が由来するといわれています。

藩堂宮改帳」により、元禄10（1697）年調査

「飯縄宮」、宝暦9（1759）

年調査「飯縄大権現宮」から、

明治2（1869）年太政官

布告により「飯縄神社」と改

称し、明治8（1875）年

4月に和佐尾村と椿峰村が合

併し「稲丘村」が誕生（のち

明治22年4月村制施行により

瀬戸川村と合併し北小川村

に。により、明治41（19



神社での式典

08) 年9月内務省令の神社整理指示事項により稲丘区内の12社を合併し「稲丘神社」と改称。村社に匹敵する財産を造成し、大字稲丘に一社存続の目的を達成し、それまで高府(旧名、竹生)の武部八幡宮の氏子を分離の協議成立(のちに八幡宮の特別崇拜者となる)を行い、神社社格昇進願を大正8(1919)年5月8日提出し、翌大正9年6月18日村社に昇格しました。昭和20年の敗戦後、GHQの統治下で社格を失い、神社庁の所屬となります。

社殿は明和9(1772)年8月建立奉加帳により安永2(1773)年4月7日に御遷宮、明治39(1906)年4月火災で全焼、翌明治40年10月8日に再建が行われました。その当時日露戦争(1904-1905)に戦勝し、北小川村で戦役した記念碑が明治40年5月社頭に建立されています。

文化3(1816)年に烏天狗の



戦役記念碑

ご神像が盗難にあう事件が發生、盗人は越後國中頸城郡(新潟県妙高市から上越市辺り)の古物商に売ったところ、古物商にて崇りあり神告によって、お迎えに行き事件が解決した言伝えがあります。再発を防ぐため、現在は高山寺のお寺に預けています。稲丘西区の神楽三頭は、大祭の時は揃ってお礼詣りし獅子宮を献備しています。五穀豊穡の信仰から、栗・本、味・大豆、特に稲に宿る神秘的な霊を考えると、稲丘の地名誕生及び飯米場、田中の地名に御魂が宿っているかもしれないと話してくださいました。

伝承から1190年近く続く信仰、今年の収穫が無事に終わるまで、健康で天災がないことを祈りながら祭典が終了しました。

(資料:稲丘神社の歴史、小川村史、上水内神社誌改訂版)



獅子宮の献備

ハロウィン
ベアちゃん



昨年12月26日、我が家に第二子、3341gの男の子が誕生しました。名前は蓮叶（れんと）です。蓮の花のようにまっすぐ育ってほしいという願いを込めてつけました。

12月23日のお昼頃、お産のサインがあ

新たな土地で産まれた命

松本 里梨さん（和手）

り24日に予定していたクリスマス会を急遽早めて23日の夜にしました。

クリスマス会中、陣痛の間隔が短くなってきました。念の為病院に電話し向かいました。病院に着くと破水もしていると言われ、そのまま入院。

「経産婦さんだから今日、明日には産まれるよ」と助産師さんに言われたので楽しみで仕方ありませんでした：が！

陣痛が来ても中々間隔が短くならず、痛みも強くないし、子宮口も開かず、入院から3日間一人で陣痛室で過ごしました。

25日の昼間、自然促進法を試してみました。するとその効果もあったのか夕飯後、強い痛みが始まり嘔吐

まで。夜間の出産でなかなか助産師さん達も来れない中、痛みに必死に耐え眠れない夜を過ごしました。

26日深夜2時頃子宮口が8cmまで開きいざ分娩台へ！

そこでもなかなか赤ちゃんがおりてきてくれず…

2時間後、長男の出産の時を思い出して無事蓮叶が産まれてきてくれました！ですが産声をあげず、原因が分からないが呼吸をやめてしまうとの事。サポートが必要と判断され蓮叶はそのまま集中治療室へ。

同室で過ごすのを楽しみにしていたのですがその願いは叶いませんでした。

私は大晦日に退院出来ましたが、蓮叶はその1週間後に退院してきました。



退院後、長男の琉乙斗の赤ちゃん返りもすごく、夫は交代勤務もしていたので育児は大変でしたが、今は琉乙斗もお兄ちゃんの自覚が出てきたのか、すすんでお手伝いもしてくれて助けられています。

私は小川に来てから2年目、まだまだわからない事だらけで不安もたくさんありますが、保育園の先生方、お友達、ママさん達とお話ししたり遊んでもらって楽しく過ごせています。

行事などにもなるべく参加して地域の方々とも交流を深めていきたいと思
います。

2人には
これからも
ずっと助け
合いながら
生きてほし
いと思いま
す。





鎌倉 農弥さん

(大久保)



大久保地区に、最近ほとんど見かけなくなった精米所があります。取材に伺った時にも「ガタンゴトン」と力強い音を

立てて小麦の製粉をしていました。その精米所を営んでいるのは、現在は夏和に移転し、数年前まで大久保でガソリンスタンドを営んでいた鎌倉農弥さん。今年88才になります。

鎌倉さんの精米所の歴史は、昭和初期まで遡ります。当時は大正13年2月に上水電気利用組合（設立発起人が農弥さんのお祖父さん鎌倉太弥治さん）の電気の送電が開始され、産業開発向上で、水車小屋から電気精米機が普及し始めました。小川村では法地地区に最初にでき、

その次が鎌倉さんのお宅でした。そして、精米所を生業として始めたのが農弥さんのお父様の鎌倉六衛さん（愛称「鎌六かまくろく」で親しまれています。）が最初だったそうです。農弥さんも中学生の頃から手伝っていたそうです。その頃は数多くあった精米所も瀬戸川平地区の川浦精米所さんの一カ所だけになってしまったそうです。

昭和24年頃から、村内道路が整備され始め、各地区に「集落精米所」ができたため商売としてやっていくことが難しくなり廃業することに。その後、車が普及し始めていたこともありガソリンスタンドを始めたそうです。

そんな鎌倉さんに転機が訪れます。昭和62年に村議選に出馬することになり、「農業振興」を公約に掲げ初当選。議員2年目の時に、東京にある小売業「らでいっしゅほーや」との取引が始まり、家の周りにあった小川の「ふき」をはじめ豆類まで取引が広がり、農業振興の一助にもなったのではと鎌倉さんはその頃を振り返っています。その後、小売業との取引はしばらく続きましたが、議長となった平成7年には業務が忙しくなり、新鮮な物を届けることができなくなってしまい、止む無く中止することになってしまいました。後に小売業の紹介で岐阜県の大きな食

品会社から村の「赤もろこし」をはじめ雑穀を卸して欲しいと商談がありました。その頃村内では自宅で使う分ほどしか栽培されていなかったようですが、高値で取り引きできた為、栽培が広がっていきました。当初これらの雑穀の精製は瀬戸川平地区にあった川浦精米所さんでやってもらっていましたが、高齢のため閉じることになり精米所をやってくれる人を探したのですが、見つからず困っていた矢先、信州新町の知人から精麦機を譲ってもらえることになりました。また旧中条村をはじめ、周辺地域からも製粉機や石臼、精米機なども譲ってもらうことができ、父親の家業の精米所での手伝いが役に立ち、機械の動かし方を知っていたので、自分で精米所をやることになりました。精米から雑穀まで精製できる精米所は少なく、鎌倉さんの精米技術は、雑穀の皮を綺麗に取れると評判にもなりました。現在でも長野市内や鬼無里、信州新町などをはじめ近隣周辺から依頼されるそうです。

今後のことについて鎌倉さんにお聞きしたところ、品質向上のため雑穀を自動で選別できる最新の機械を村で導入してくれるそうで、将来的には、若い人に精米所を

引き継いで欲しいという思いがあります。そこには、「村民の生活の向上や農業振興のため、昔から地域にある物を生かして交流を深めながらこれからの人生の中で楽しみを持ち続けてもらえたら」という願いと共に小川村の発展、農業の発展を強く願い、それに尽力されてきた鎌倉さんの思いが込められているように思います。

そして、鎌倉さんには夢があります。それは精米所に来た人たちとお茶っごができる空間を自宅の一角に作り年齢をとつても和やかな時間を過ごしたいということ。鎌倉さんは働き盛りの頃に大病を患いましたが、その時の出会いが人生観を大きく変えたそうで、鎌倉さんにはその頃から「自分はみんなのおかげで助けて頂いた。」「人のご厚意で自分は生かされている」という思いが常にあります。そんな鎌倉さんだからこそこんな素敵なお夢があるのだと思います。

柔らかな笑顔が印象的な鎌倉さん。ますますお元気でこれからも村の将来を見守っていただきたいと思います。



歴史探索

「電気」

今から100年前の大正12年12月27日、西山地域に電気という文明が初めて試験送電に成功した日をご存じでしょうか？その3カ月前の9月1日は関東大震災が発生し、東京首都圏は震災復興、支援物資、経済が混乱した時代のなか、翌大正13年2月に出資組合（当時の南小川村、北小川村、津和村の一部（現在の長野市信州新町山上条・越道・山穂刈）の個々の家に1個の電灯の送電が開始され、暗い世相、貧しい農村に近代の希望の光で生活が一変していきます。

今回は電気により、この地域の生活がどのように変化したのか関連を調べてみました。

（館報おがわNo.226 2021年冬号に「小川に灯る」掲載の続編）

☆水の力を利用した役目

○水車小屋

集落ごとの沢筋に、水車小屋が明治中期に村内に百カ所近くありました。組や集落で共同設置し、当番を決

めて昼夜問わず巡回使用で、石臼によるそば粉・小麦粉・米粉、杵による玄米・大麦・小麦などを挽いていたとあります。水量が確保できない成就地区は、水が豊富にある土尻川沿いの小根山地区を利用していたとあります。地域間のつながりで姻戚関係が多いのも特徴と考えられます。電気による精米で、水車小屋の役目が終わり、

昭和初期以降から姿を消しました。

○水利組合

大正9年に現在の夏和水利組合が燃料エンジンポンプで、土尻川から揚水を行い、6町9反歩のかんがい用水を行ったとあります。その後大正13年上水電気組合の電力供

《土尻川沿いの水利組合》

水利組合名	設置年月日	かんがい面積
夏和水利組合	大正9年7月	6.9ha
六反用水	昭和5年6月5日	1.0ha
鴨の尾用水	昭和16年5月16日	1.5ha
高府水利組合	昭和19年7月	8.3ha
大久保水利組合	昭和21年4月	4.0ha
島田水利組合	昭和25年6月	3.0ha
宮西沖土地改良区	昭和33年6月	5.0ha
小根山水利組合	昭和33年5月～35年	5.6ha
女坂土地改良区	昭和34年10月	3.8ha



長野市中条御山里 水車小屋

給により電気ポンプに切り替えたとあります。

土尻川沿いに電気揚水ポンプによる、かんがい用水の水
利組合が増え、稲作面積が増加したとあります。

☆役目を終えた道具

○石臼

水車小屋の役
目が無くなり、使
われなくなった石
臼。道具への感謝



高山寺境内

の気持ちを含め、供養塔として祀られています。

○石油ランプ

一戸に一灯の時代、明りを灯すには、石油ランプが重
宝されました。一回使うと、燃焼ススがひどく、毎日ラ
ンプを磨くのは、学校から帰った子供の役目だとありま
した。電灯により、ランプ磨きから解放されました。

☆電気による生活スタイル

○電灯

一戸に一灯が灯った日、今までロウソクやランプの灯が

弱くハッキリ見えなかった家の隅々のヨゴレがよく見えた
とあります。現在は、暗くなると電気の明りが必要です。

○冷蔵庫

冷蔵庫のない時代、食糧の保存が長持ちする発酵食品
(味噌、醤油、漬物)・塩漬け(山菜、魚、キノコ)・甘露
煮(佃煮など)などの各家庭の「味」伝承文化がありま
した。その都度、食事を作り、作り置きが難しい時代、
電気による冷蔵庫の登場により、食品の品質・鮮度が保
たれ、家事に費やす時間が一変します。

○洗濯機

タライに洗濯板で洗濯物を手洗いしていた時代。洗濯
機の登場により家事に費やす時間が一変します。

○ラジオ、テレビ

電気のおかげで、娯楽の時間が増えました。昭和6年
からNHK長野放送局のラジオ放送開始、昭和33年テレ
ビ放送開始で、昭和34年皇太子の成婚、昭和39年の東京
オリンピックの放映で、テレビの設置が集団視聴から個人
宅へ変わりました。

○共同・個人精米所からコイン精米所へ

水車小屋から、電気による共同精米所が各集落に増え

ました。利用者の当番を決めて使用していましたが、なかには個人で精米機を買う方もいました。使用には精米時間、清掃、衛生的な問題がありました。現在は、必要な量をお金を払って短時間で処理できる農協のコイン精米機の利用者が増えました。



ながの農協西山支所
コイン精米所

☆時代とともに役目を終えた：

○上水電気利用組合

大正8年6月26日、設立発起人70名の代表鎌倉太弥治が上水生産組合の設立申請を県知事に提出し、大正10年2月3日に許可が下る。大正11年3月30日に電気事業法を準用し得るものと通信大臣より認定される。4月1日から工事着手、6月22日に上水電気利用組合に名称変更、大正12年12月27日に試験送電成功（発電所そばのお宅、鬼無里）、翌13年2月に送電開始されました。それから20年、昭和19年3月1日に配電統制令の実

施により中部配電式会社へ、電気利用設備を譲渡し、設立から25年、送電開始から20年でその役目を終了し、解散しました。

○発電所

中部配電式会社に譲渡され、昭和46年11月まで電気を供給していました。



旧上水電気発電所資料館

送電開始から発電停止まで47年間、毎日電気を送り続けました。昭和51年に発電所が廃止に伴い機材を当時の鬼無里村に譲渡。翌昭和52年11月に資料館として開館、平成16年3月に資料館の閉館に伴い、旧上水電気発電所設備保存組合を設立し、平成17年10月にふるさとらんど小川に資料館を建設し、現在に至っています。

○発起人の鎌倉太弥治さんは…

明治2年生まれで、20歳でハワイへの移民計画を中止させられ、南小川村収入役を就任。その後、南小川村長を3期歴任、その間郡会議員、県会議員に当選され地方行政のために尽くし、明治43年高府小根山の各小学校を統合し一校制を実現し教育施設の基盤を作り

上げました。

政界引退後は、地域の経済界・産業界に力を注ぎ、高府商行を創設しその社長、また西山製糸会の社長や更に農業倉庫小川信用組合等の創設にあたり理事を務め、農村振興のため尽力されました。

そのうちのひとつ、大正7、8年頃から計画された上水電気利用組合の創設組合長として、関係機関等への説得に苦勞され、組合電気としては全国第3番目の認可といわれています。

晩年、昭和金融恐慌・世界恐慌の影響で融資銀行の経営が悪くなり、産業界に大きな打撃を受けるなか、電気が送電されて10年目の昭和9年66歳で亡くなります。

それから、40年目の昭和49年に偉業を称えて頌徳碑を小学校東側に建立し、来年で50周年を迎えます。



頌徳碑

〔参考資料「小川村史」「小川村の石造文化財」

〔鎌倉太弥治翁頌徳碑建立記念誌〕

《小川短歌会作品》

◎日本晴れワラ屑吹き出すハーベスター初はつめの重さにえんこら歩む
金木 初義

◎子ら作る新米炊いて手づくりの寿しで祝えり感謝をこめて
稲葉 利江

◎秋まつりの夜店に鉛玉なまり一元を子らへもとめし遠き思おもい出
大日方弘子

◎打ち上げる花火師の動き見えるほど間近まぢりに眺める秋まつりの夜
鎌倉まさ子

◎大粒の粟入り赤飯食べながら子どもや孫と祭ばやし聞きく
大日方泰子

◎幟揚がり神楽ばやしに大花火秋祭あきまつりでわき立つ過疎の山里
稲葉 利郎

夏の公民館 図書室まつり

「みんなピカソ お絵かきワークショップ」を開催



図書室だより
小さな木の空

第113号
 図書委員会

五感を使って過ごした一日

夏休みが始まったばかりの7月29日、公民館にて図書室まつりを開催しました。大人と子ども合わせて28名が参加。読み聞かせや紙芝居に加え、村内在住の現代美術家・木村さんを招いてのお絵かきワークショップ、流しそうめん、図書室探検と盛りだくさんの一日でしたが、本に親しみ、みる、きく、触る、味わうなど五感をフルに使って活動的に過ごすことができました。私たち図書委員にとって、楽しい時間をありがとうございました。



図書委員の読み聞かせ。子どもたちの聞く力、集中力に驚かされます



流しそうめんに歓声を上げながら箸をのばします



目をキラキラさせて本を選んだり、本を読む子どもたち



高学年の子どもによる紙芝居に、じつと聞き入る



お絵かきの題材は夏野菜。描き方を子どもたちに説明する木村さん

「野菜をよく見て、紙は見なくて、アリさんになったつもりで野菜のまわりを歩いて行ってください」。いつもとはちょっと違う!? 「先生」の言葉。上手く描こうとするのではなく、自分のペースで描いた線や色は自由な魅力にあふれていました。「うまい下手は関係ない。みんな違う、絵ってそういうもの」という木村さんのお話が印象的でした



「楽しかった!!」。イベントの最後にみんなで記念撮影

ブックスタート

～生後6ヶ月の赤ちゃんへ
本のプレゼント～

令和4年11月から
令和4年12月生まれの赤ちゃん

『子どもに読んで聞かせたい本は?』



みやなが
宮永 秋仁くん

「あやほんのたね」
小林 由季



きたま
北山 雄大くん

「パンとんぼぼう」
おにぎりぼうやのたびたち」
柴田ケイコ



まつもと
松本 蓮叶くん

「ぷくぷく」
くまのくま

図書室の楽しみ方 ～図書委員のひとりと

私のお気に入り

「おうち仕事」の本棚

図書室に並ぶ本棚の中で、私が好きなのは、料理、片付け、健康、ものづくりなどの本が並ぶ「おうち仕事の本棚」（勝手に命名）。こごんまりとしてはいるけれど、パラパラとページをめくっていると、

自分の暮らしに生かせそうなヒントが見つかります。スマホなどで検索すればいくらでも便利な情報が出てくるのですが、図書室の静かな空間で本を手にとるのもたまにはいいなあと感じています。皆さんも図書室でお気に入りの本棚を見つけてみませんか？



次回イベントのお知らせ

寒くなる季節は読書にもぴったり。図書委員会では、読み聞かせなどじっくり本を楽しむ時間を企画中です。

詳しくは後日チラシを発行いたしますので、公民館、図書室などをご覧ください。お楽しみに。

水墨画に魅せられて 小川美江子（大久保）

小川さんは、小川村保健センターに長年勤務し、住民の健康を見守ってきました。

定年後、残りの人生に生きがいを求めて模索するなか、公民館の主催した水墨画教室と出会い、墨一色であらゆる物を表現できる墨絵の奥の深さに引き込まれ、画材を求めて県内外を歩き、遠くは発祥の地の中国まで旅をして描いたこともあるとのことでした。



「上高地」

水墨画教室から会員を募り、水墨画愛好会として活動してきました。一時は指導者に恵まれず、基礎を学ぶ機会がないまま模索した時期があるなか、公民館の助成で講師を迎え、水墨画の基本を受けおかげで、県レベルの展覧会に出展する会員が現れ、順調に軌道に乗り始め10年以上



個展

が経つなか、指導者や画友がこの世を去り、かつて夢中で水墨画の世界に飛び込み、全国展、県展、それぞれの展覧会に出品し、入選・入賞も多く受賞された充実した日々の思い出や、長野県水墨画協合理事、信州水墨画協会理事、信州画遊会理事などを歴任した出会いなどを振り返っているとのことでした。

昨年、ふるさとらんど小川で20年余「雅号：小川江葉」として描き貯めた水墨画の作品の最後の展覧会を開催し、多くの来場者から鑑賞及び購入をいただき大変ありがたかったとお話しくれました。

令和5年3月をもって、今まで活動してきた水墨画愛好会の会員一同とともにお別れ会を行い、残された余生を初心に戻り、自宅で水墨画を描き過ごしているとのことでした。

古山



染野利喜雄 (三反田)

(元郵便局員)

昭和40年、北と南が合併して10年、終戦から20年が経過し、昭和39年東京オリンピック大会、昭和40年日本万国博覧会と日々の生活が豊かになりつつ、地域で使われていた生活道路について、毎日郵便配達をした方にお話を伺いました。

当時の高府郵便局は、今の西条印刷所の場所にありました。中学校を卒業し、郵便局員として勤め始めて数年の染野利喜雄さん。朝8時に出局し、郵便物の配達を組むことからスタート。当時の人口は7千人近く、世帯数は約1600戸で家族構成まで覚えるに同姓同名には大変苦労したとお話をしてくださいました。

局を出発し、まずは大町往来沿いの釜蓋と大久保の個人ポストを回って、小根山方面の現在の小川荘のそばを通り、古山東西地区の絹張、沢入、砂畑、岩内、湯屋場、境明賀、湯之沢、小屋、二又、中畑、吉刈、大安場、西

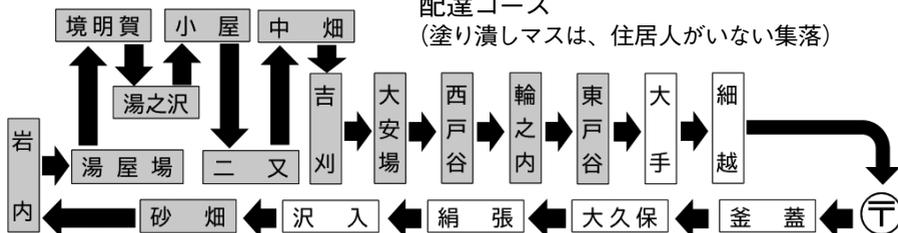
戸谷、輪之内、東戸谷、大手を経て、最後の細越を済ませ、16時頃までに局に戻るコースを含め村内を10地区に分割し一筆書きで網羅します。生活道として、集落を結ぶ道だったり、耕作道、萱場道などいろいろな用途の道を活用し、毎日手紙を配達したそうです。

雨が降れば、西山地域特有の粘土で足を奪われたり、雪が降れば新雪で一歩も前に進むことが出来ないなど苦労されたとお話されました。

それから10年間、泥道に砂利を敷き全村舗装へと進み、バイクや車が増え、特に交通が不便な集落を対象に集落整備事業を活用し、集落移転が行われるとともに、細い生活道路は使われず草木に覆われていきました。

配達コース

(塗り潰しマスは、住居人がいない集落)



路端の隅でたずんでいる動植物や石造物について紹介します。このコーナーに情報を提供されたい方は公民館までご一報ください。

シリーズ 路端の小さな命 ⑤

道端に群生するきのこ

☆身近なキノコ「畑シメジ」

梅雨時と秋に群生する「畑シメジ」と呼ばれるキノコがあることを知っています

か？名前からも分かるように、畑や道端、庭先などに株状になって地面から発生します。実はこの畑シメジ、松茸やホンシメジにも劣らないほど食感や風味も良く美味しいそうです。そんな庭先でも発見できる身近なキノコ「畑シメジ」について、調べてみました。

☆キノコは朽ちた木や落ち葉の解体屋？

湿った環境を好むキノコは、胞子が飛んでくる湿度の高い土の中で繁殖します。栄養のとり方によって「腐生菌」と「共生菌」に分けられています。腐生菌の畑シメジは、地中の朽ち木や腐ったワラ、落ち葉を栄養源として分解し、土に還つ



公民館敷地に発生した「ナラタケ」、通称モトアシ

ていきます。

森林が朽ち木や落ち葉で埋め尽くされないのは「解体屋」と呼ばれる腐生菌キノコが一役頑張っているおかげなんですね。一切無駄のない自然界の循環システムに感心します。

☆森の循環を担うキノコ

まだ草刈機が普及しておらず手作業で行っていた時代、草を刈った場所にキノコがよく自生していたそうです。当時の人たちは、自然景観を大切にし草も刈りっぱなしにせず畑の堆肥として活用し、自然の循環システムを上手に利用して暮らしていました。時間に追われる現代の暮らしは、便利さだけを追い求めてきた結果、キノコが生育する環境も失われてきています。

秋の味覚であるキノコを堪能する機会に、私達の目に見えないところで地球上の生態系が命の循環を繰り返している事を認識し、私達はその恩恵を受けていることに改めて感謝したいと思います。

館報おがわ (232号)

小川村公民館 / 〒381-3302

長野県上水内郡小川村大字高府 8695

発行者：松本利光

編集者：松本博充

TEL・FAX：026-269-2077

E-mail：komin@vill.ogawana.gn.jp

令和5年11月9日発行